

(論文内容の要旨)

本論文の課題は、18世紀スコットランドの思想家アダム・スミスの『道徳感情論』に焦点を合わせ、デイヴィッド・ヒュームやフランシス・ハチソンなどの同時代の思想家との比較を試みつつ、スミス倫理学の構造と意義を解明することである。

序論では、各章の構成を示し、先行研究に対する本論文の意義を説明した。本論文では、スミス倫理学の主題を便宜上三つに分類し、第1章～第3章で道徳判断の心理学的分析、第4章で正義に基づく社会の形成、第5章と第6章で社会における行為者の生き方の指針という各主題を検討する。そして、これらの主題が一貫して、「適宜性」概念と「自己抑制の社交モデル」に基づいて論じられることを明らかにする。このようなアプローチを採用する本論文は、国内外を問わず数少ない哲学・倫理学の観点からの研究であり、スミス倫理学の体系的・総合的把握を試み、その構造と意義を解明する点に最大の特徴がある。

第1章では、スミスとヒュームの「共感」論と「道徳感情説」を検討する。その歴史的背景には18世紀イギリスにおける道徳認識論をめぐる論争や、シャフツベリとハチソンの「道徳感覚説」がある。ヒュームの共感概念は、(1) 即時的に成立する非認知的共感と (2) 因果推論を含む認知的共感に大別され、さらに (2a) 他者の現在状況のみ対象とする「限定的共感」と (2b) 過去・現在・未来を含む他者の全状況を対象とする「拡大的共感」に区別される。ヒュームの道徳感情説は、共感原理に加えて、「一般的規則」、「比較」、「対照」、印象の類似に基づく情念の「循環」によって道徳感情(是認・否認)を説明する。一方スミスの道徳感情説では、観察者が「想像上の立場交換」を通じて「共感的感情」を形成し、それと行為者の情念との一致不一致(共感の成否)に応じて道徳感情が発生する。道徳感覚説から道徳感情説への転換、「称賛願望」への注目、道徳論の「世俗化」という基本的方向性を共有しつつも、スミスとヒュームの共感論は対照的でさえある。すなわち、人間の心の「類似性」を基盤にするヒュームの「自然的」共感論と、想像上の立場交換

や「自己抑制」という操作の介在するスミスの「人為的」共感論という対照性である。スミスは、「相互的共感の快」と「共感への欲求」に促された観察者と行為者がそれぞれ、情念を「適宜点」まで調整することで共感が成立することに注目し、あらゆる徳の基底に自己抑制の作用を見出す。

第2章では、スミス倫理学の中核である「適宜性」を分析し、(1)情念の適宜性、(2)反応的感情の適宜性、(3)行為の適宜性、(4)性格特性の適宜性、(5)事物の適宜性に類型化した。適宜性の基本形態(1)に関してスミスは、ヒュームが「一般的観点」の議論で導入した「道徳の社交モデル」を継承しつつ、我々がその都度の状況にふさわしい程度まで情念を抑制するという「自己抑制の社交モデル」を提示する。またスミスは(4)に関して、習慣と適宜性の関係を考察し、「習慣から独立した適宜性」を導入する。習慣から独立した適宜性は行為者の全状況に対する適宜性であり、想像上の立場交換を正確にすることで把握できる。さらにスミスは習慣と適宜性の区別をふまえて、未開社会の道徳と文明社会の道徳を比較し、道徳の内実が各社会の状況と相関的に変化することを指摘する。さらにスミスは(5)に関してヒューム(効用道徳論)に対する批判をも意図しつつ効用と適宜性の関係を論じ、道徳感情の最初の源泉は適宜性であり、効用は既存の道徳を説明する二次的なものにすぎないという見解を明示する。適宜性と習慣および効用との関係を考察する際にスミスは、道徳的实践に携わる人々の「日常的視点」と、この実践を俯瞰する「哲学的視点」を区別する。習慣から独立した適宜性や効用は哲学的視点において把握されるが、スミスは日常的視点と哲学的視点を完全には分離しない。想像上の立場交換を通じてよりよい状況認識に到達すれば、原理的には誰もが日常的視点から哲学的視点に移行できるし、二つの視点は連続的に捉えられる。

第3章では、行為の関係者が感じる「感謝」と「憤慨」という「反応的感情の適宜性」、すなわち「功罪」の道徳感情に関する議論を検討した。行為の「予想される帰結」に基づいて発生すべき功罪の道徳感情が、日常的には行為の「現実の帰結」に基づいて発生しがちであることを、スミスは「道徳感情の不規則性」と呼ぶ。この不規則性論は、行為の帰結と道徳感情の関係に関するハチソンの議論(自然的善

と道徳的善の区別、過失論)、ヒュームの議論(檻樓をまとった徳、一般的観点、道徳感情の補正)をふまえており、現代倫理学における道徳的運をめぐる議論を先取りしてもいる。スミスは帰属可能性と実質的責任を区別しつつそれらを道徳感情説の枠内で論じ、行為者視点から道徳感情の不規則性を考察し、意図せず悪をなした行為者の感じる「自責の念」に着目する。現代倫理学における道徳的運をめぐる議論を参照しつつ、スミスが道徳感情の不規則性に対して提示した議論を整理すると、次の三つになる。すなわち、(1)行為者に動機を帰属させる際は知識の有限性ゆえに動機を推定する証拠として行為の現実の帰結を参照せざるを得ないという「自然主義」的正当化、(2)贖罪行動と結びつく自責の念に固有の価値を認める「非帰結主義」的正当化、(3)将来の行為の動機づけを改善し、自らの関与した悪への感受性を高めるという公共的効用を自責の念に見出す「帰結主義的」正当化である。道徳感情の不規則性という形でスミスが、行為の現実の帰結と道徳感情の関係を論じたのは、個別的状況に対する情念の適宜性を道徳的評価の基礎に据えたからである。

第4章では、「正義」の説明・正当化・執行という各文脈における「共感」と「効用」の役割に注目して、ヒュームとスミスの正義論を比較した。正義・効用・共感というヒューム・スミスに共通の問題設定は、近代自然法学から継承した思考様式である。すなわち、利己的人間が社会を形成する際は「所有権」を規定する正義の規則が必要であり、この規則は「公共的効用」を持つという発想である。ヒュームの「コンヴェンション」論によれば、所有権規則の起源は「私的効用」であり、規則遵守に伴う「公共的効用」が所有権規則を正当化し、正義の執行の際にも「公共的効用」が考慮される。そして共感は、コンヴェンション形成とその後の道徳感情の発生に関与する。一方スミス正義論では、「公平な観察者」が加害者の動機を否認し被害者の憤慨に共感するという個別の道徳判断を帰納的に一般化したものが正義の規則である。一見すると市民的行政や軍事規律に関わる刑罰は公共的効用に基づいて執行されるが、この場合も実際にはより正確な想像上の立場交換を通じて発生する道徳感情が、この種の刑罰を正当化する。このように正義の説明・正当化・

執行いずれの局面でも、ヒュームは効用に依拠し、スミスは共感に依拠する。ただしスミスにおいて共感是人為的作用であり、想像上の立場交換が正確になれば結果として関係者の効用が道德判断に反映されることが、スミス正義論の前提である。

第5章では、『道德感情論』初版・第2版・第6版における「良心」論の変遷を中心にして「道德的行為者」の問題を検討した。初版からスミスは、我々が自己の性格や行為を評価する際に、行為の遂行状況に対して特別な利害関心を持たず、その状況を熟知した「第三者」の視点を採用すべきことを説く。想像力が胸中に形成する他者の視点が良心であるという「良心起源論」は改訂を通じて精密化され、第6版では良心が「想定された公平で事情に通じた観察者」と定式化される。他者視点に起源を持つ良心が、現実の他者の意見から自律的に機能しうることを論証するためにスミスは第2版と第6版で神学的議論を導入するが、全体の論調としては道德感情説に基づく良心起源論が一貫している。この点でスミスはバトラーの生得的良心論を転換し、その上で良心の作用を補うものとして「道德の一般的規則」や「義務感」を導入する。また、道德的行為者の形成過程を論じる際に、ハチソンやヒュームと同様、「称赞願望」に注目するスミスは、この称赞願望が社交を通じて「称赞への愛」から「称赞に値することへの愛」へと洗練されるという形で道德的行為者の形成を論じる。ただしスミスにおける道德的行為者は自足的存在ではなく、社交を通じて陶冶・維持される。このように良心と道德的行為者に関する議論も、自己抑制の社交モデルに基づく。

第6章では、18世紀の道德・政治・社会論を特徴づける語彙であり、スミス倫理学の基底にある「徳」概念を検討した。スミスは、適宜性は「是認」を、徳は驚きによって高められた是認すなわち「感嘆」をそれぞれ引き起こすという形で、道德感情説に即して徳と適宜性を区別する。仁愛を徳の原型とするハチソン、「有用性」や「快適性」の観点から徳を規定するヒュームが、恒常的な「性格特性」に立脚して徳論を展開したのに対して、スミスの適宜性概念は徳を個別化する。すなわち、『修辞学・文学講義』における性格記述の「個別的・間接的方法」に関する議論や、『道德感情説』で適宜性と徳の関係を主題化した箇所をつきあわせて考察すると、

スミスが徳を「個別的状況」に即して捉えたことが明らかになる。ハチソンとヒュームが親密圏のように気心の知れた人間関係から公共圏への拡張を連続的に捉えるのに対し、スミスは我々がお互いに「見知らぬ人」として遭遇する市場という公共圏に依拠しつつ、それぞれの社交の局面にふさわしい程度に情念を抑制することを説く。自己利益の合理的追求を可能にする「慎慮」や、商業社会の調整原理である「正義」を重視することに見られるように、スミスは自己抑制の社交モデルによって市場社会の道徳を解明したのである。

「結論」では、各章の議論を確認しつつ、スミス倫理学の構造を示した。すなわち、その基礎となるのは、状況認識を正確にするための想像上の立場交換という作用の介在する人為的共感論である。これをもとにして道徳感情説が展開され、道徳感情がつねに何らかの他者の感情に参照関係を持つとされる。そして我々が共感と反感や道徳感情をやりとりするのが、その都度の個別的状況における社交であり、見知らぬ人々の形成する空間では自己抑制が必要になるというのが、市場の商取引関係を念頭においた自己抑制の社交モデルである。この社交を成立させるのに必要な自己抑制の程度を示すのが適宜点であり、適宜性とは原因となる状況に対する適合性に他ならない。人為的共感論・適宜性・自己抑制の社交モデルを軸とするスミス倫理学の意義は四つある。

第一に、適宜性概念は個別的な状況認識の重要性を説くものであり、公平で事情に通じた観察者が動機に共感できる行為、つまり状況における適宜性のある行為を遂行せよという行為指針を提示する。第二に、時間軸という観点の導入であり、自己抑制の社交モデルは、我々の道徳的実践の起源と現状を一定の時間の推移に沿って解明する。第三に、スミスは想像上の立場交換の理論によって、効用計算にまつわる諸問題（計算は可能か、誰が計算するのか、誰がその正しさを保証するのか）を取り扱っている。すなわち、社交に参加する際はその都度の状況をよく理解することが必須であり、スミスにおいては、効用の考慮も立場交換を通じた状況認識の一部と位置づけられる。第四に、スミスは日常的視点と哲学的視点を区別するが、想像上の立場交換が正確になれば、原理的には誰もが哲学的視点に立ちうる。この

ようにスミスは、効用の考慮をその都度の状況認識という形で、想像上の立場交換と適宜性の中に組み込んだからこそ、日常的視点から個別的状況を重視する理論を展開することができたのである。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、アダム・スミス『道徳感情論』を倫理学の観点から分析し、ヒュームやハチソンといった同時代の思想家との比較検討を通じて、スミスの倫理学の全体像を描き出そうとするものである。経済思想史の領域でも、単なる経済学者ではない道徳哲学者スミスということがしばしば指摘されるが、一体いかなる意味でそう言えるのか明確にするには、スミスの倫理学の全体像の把握が不可欠である。ところが哲学史的な位置づけとしては、スミスの思想はヒュームの思想の焼き直しにすぎないという通説的評価があるために、スミス固有の倫理学を抽出し、その構造と意義を示すことは、きわめて困難な課題である。

本論文の第一の意義は、まさしくこの困難な作業に倫理学の観点から取り組み、とりわけ前半の3章において、同時代の思想家とりわけヒュームとの比較検討を試みつつ、スミスの倫理学の基礎を明らかにした点にある。従来、スミスとヒュームの倫理学は、「共感」の倫理学または「道徳感情説」ということで一括されてきた。これに対して論者は第1章において、スミスのいう共感には「想像上の立場交換」や情念の「自己抑制」という操作が介在することに着目し、ヒュームの「自然的」共感論とスミスの「人為的」共感論という原理的な相違点を抽出する。

つづく第2章では、スミスのキーワードでありながらも従来は正面から取り上げられることのなかった「適宜性 (propriety)」概念に即して、自然的共感論と人為的共感論の相違点が追究される。論者は、適宜性とは原因に対する適合性であるというものの意味を、共感論や道徳感情説と関連づけて考察し、「一般的観点」に関するヒュームの議論から「道徳の社交モデル」を抽出し、これに対比されるスミス倫理学の核心を「自己抑制の社交モデル」と特徴づける。第3章では、「道徳感情の不規則性」という事象を取り上げ、スミスが適宜性によって道徳判断を個別の行為遂行状況に即して捉える結果として、行為の意図(予想される帰結)ではなく現実の帰結が道徳判断に影響を及ぼすことの意義を探求する。その際に論者は、道徳

的運をめぐる現代倫理学の議論を参照しつつスミスの議論を再構成するが、この一連の考察には、哲学・倫理学の観点からのスミス研究という本論文の独創性がいかんなく発揮されている。

前半3章で示された「自己抑制の社交モデル」を踏まえて、後半3章では、社会形成の問題（正義論）、良心や徳といった個人の行為指針の問題が社交モデルの観点から検討される。第4章では、正義の規則の説明・正当化・執行それぞれの文脈における共感・効用概念の役割の分析を通じて、効用に依拠するヒュームの功利主義的正義論と共感に依拠するスミスの非功利主義的正義論という従来の解釈の一面性が指摘され、スミスにおいては想像上の立場交換に基づく人為的共感論と効用の考慮とが結びつきうることが示される。そして、第5章の良心論では、『道德感情論』初版・2版・6版の改訂問題も視野に入れて各版の論旨を詳細に比較検討し、スミスが自己抑制の社交モデルに立脚して良心と道徳的行為者を論じたことが明らかにされる。第6章では、18世紀の道德・政治・社会論の鍵概念である徳について、『道德感情論』の断片的叙述と『文学・修辞学講義』の性格記述法の分析を通じて、スミスの徳論は適宜性で徳を説明するために、ハチソンやヒュームの徳論とは違って、恒常的な性格特性ではなく、個別的状況における有徳な行為に着目する理論であるという、現代の徳倫理学研究にとっても有意義な問題提起がなされる。さらに、論者は、正義や慎慮を重視するスミスの徳論が、自己抑制の社交モデルの観点から商業社会の道德を解明したものと特徴づける。

以上のように、論者は、自己抑制の社交モデルを軸にして、道德感情・適宜性・正義・良心・徳といったスミス倫理学の各論の包括的・体系的理解を試みるという、先行研究には見られない独創性の高いスミス解釈の方向性を提示している。ただし、本論文の功績はそれだけではない。論者のスミス研究は、つねに、比較対象としてのヒュームを意識して議論が展開されている。その結果として、本論文は、ヒュームに関しても、堅実なテキスト読解に基づきつつ、従来の研究ではさほど注目されてこなかった社交と会話の意義に着目し、道德の社交モデルという形でヒューム倫理学の解釈の方向性をも提示する。スミス倫理学の全体像を描き出す作業のいわば

副産物として、ヒューム倫理学の解釈に一定の見取り図を提供したことも、本論文の哲学・倫理学研究としての水準の高さを物語っている。

以上のように本論文は、適宜性概念の分析から得られる自己抑制の社交モデルを軸にして『道徳感情論』の様々な主題の統合的解釈を試み、適宜性・人為的共感論・自己抑制の社交モデルという形でスミス倫理学の基本構造を描き出す。他の思想家との比較を通じて、一見すると冗長なスミスの叙述に秘められた哲学的洞察とその意義を取り出す一連の議論は、単なる経済学者ではない道徳哲学者スミスを浮かび上がらせており、刮目すべきものがある。しかし、社交モデルの社会哲学的な含意が必ずしも十分には明らかにされていない点、『道徳感情論』で基本的方向性が示され『国富論』で全面展開される市場や統治という主題については自生的秩序論と特徴づけたにとどまる点など、いくつかの難点がないわけではない。ただし、これらは論者の今後のさらなる検討を通じて解明されうることであって、本論文の意義をいささかも減じるものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2008年12月4日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。